第19回「鬼は外！ 福はうち！」

皆さんは「節分」と聞いて何を思いますか？「鬼に豆を投げて、福を呼ぶ」と考える人が多いと思います。「節分」は、季節を分けるという意味で、立春・立夏・立秋・立冬の前日を指します。旧暦での立春は、年の始まりを意味しており、冬から春に変わる春の節分は大切にされ、現代で「節分」として受け継がれる行事となりました。起源は諸説あるようですが、季節の変わり目には邪気（鬼）が入りやすいと考えられ、その邪気を払うために行われるようになったといわれています。

二渡の鬼が町内巡行

2月4日（日）、安渡の大槌稲荷神社では節分祭が催され、二渡山から11人の鬼が人里を訪れ、町内を巡行しました。この鬼たちは、町々家々の厄を背負って各所を練り歩いた後、神社で全ての厄を祓い清められることから「二渡の鬼は、厄を祓い、福を授ける」とも伝えられてきました。

「親の言うこと聞いでっか」「兄弟ゲンカはすんなよ」と子どもたちを戒めながら町内を周り、おしゃっちに到着した鬼たち。鬼に怯えて泣き出し逃げ回ったり、果敢に鬼に立ち向かう子どもたち。おしゃっちの館内には、たくさんの地域の人や親子連れが集まり、「鬼は外。福はうち」の掛け声とともに、鬼たちにめがけて一斉に豆が投げられました。

大槌稲荷神社権禰宜（ごんねぎ）の小國正人（おぐにまさと）さんは「私が高校生の時は、盛大な祭りだった。鬼たちは、町内を歩いている時も豆を投げられていた」と、当時を振り返ります。この節分祭は、毎年恒例の行事でしたが20年ほど前に休止に。令和2年に規模を縮小しながらも再開しましたが、その後、コロナ禍のため開催が見送られました。令和5年、3年ぶりに震災前に近い規模で復活し、本年は2回目の開催となりました。

豆まき神事で福来たる

鬼が巡行した後には、大槌稲荷神社の拝殿で厄除大祭釜鳴（かまなり）神事が行われ、約60人が参列しました。この神事は、中央にある大釜で米を蒸し、その時に出る音の大きさや長さで、1年の吉凶を占い、厄を祓い清めるものです。大釜から音が鳴らない年は特に気を付けるようにと、古くから伝えられてきました。本年は、音鳴りが早く、短く大きな音が拝殿に響きました。

15の個人や団体から協賛いただいた品物と豆は、神前でお祓いされた後、神社の境内に集まった人たちに向けて全てまかれました。神事で祓い清められたものを訪れた人に配ることで、福を分け与えるという意味があるといいます。境内を埋め尽くすほどに集まった人たちは、絶えずまかれる福を受け取り、会場には喜びの声や笑顔が溢れていました。

最後には、鵜鳥（うのとり）神楽の奉納が行われました。この神楽は、国指定重要無形民俗文化財に登録されていて、毎年1～3月にかけ、隔年交互に三陸沿岸を巡行する普代村に伝わる伝統芸能です。神事に参列した皆さんは、凛々しくもあり、時には観客を巻き込んだ愉快な演舞を楽しんでいました。

大槌の祭り魂を　後世に繋いでいく

子どもの頃に鬼から逃げていたことを今も覚えており、成長してからは、鬼に扮して子どもたちを追いかけたこともありました。東日本大震災津波やコロナ禍により休止せざるを得ない状況となりましたが、この節分祭は無くしてはならない、後世に伝えていきたいという思いで復活をさせました。

お祭りは神事で厳粛なものである一方、大槌まつりのように、神様と人が共に楽しみ賑わう側面があり、それが大槌らしさでもあります。厳粛な神事はもちろん大切だが、老若男女問わず、町民の皆さんが一緒に楽しめるような「大槌の魂たる祭」を欠くことなく、伝え続けていきたいです。

大槌郷総鎮守大槌稲荷神社 権禰宜（ごんねぎ） 小國（おぐに） 正人（まさと） さん